連載 第40回

福聚山史

池浦泰憲
及川一晋 編

『福聚山史』を読む前に

このたび、常円寺の歴史をまとめた『福聚山史』を発刊いたしました。この「季報」とともにみなさんのお手元に届いているかと思います。具体的な内容についてはゆっくり読んでいただくとして、ここではその概要をまとめました。読んでいただく上での一助としていただければと思います。

◇いまに息づく「伝承」の大切さ

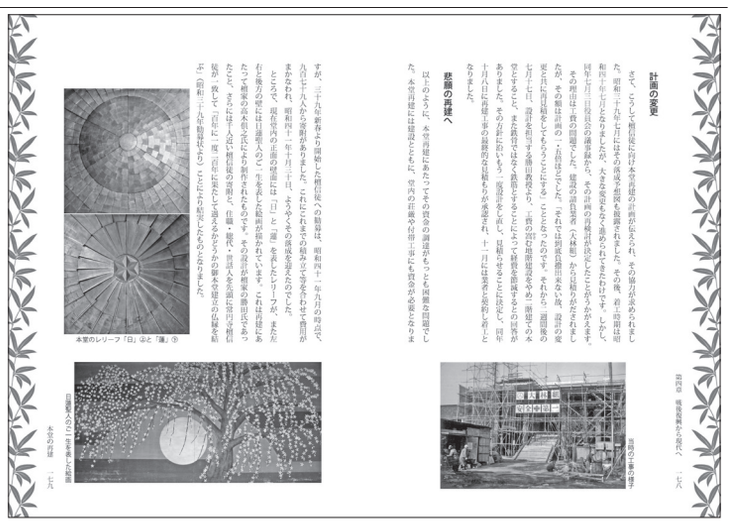
第一章「常円寺の草創」は、常円寺がかつてあったとされる幡ヶ谷の地を歩き、聞き取り調査をした成果が大きな柱になっています。そこでは常円寺がかつてあったことを推測させる史跡があり、またそこに残った下寺を支えた人物が今でも常円寺の檀家であることなどを述べています。このように代々言い伝えられてきた、いわゆる「伝承」は、はっきりしないこと、不確定な部分をもっていますので慎重に取り扱わなければなりません。けれども、今現在までその土地に住む人たちの口々に伝えられ、記憶として残されてきたことは、たとえ文字として残っていても誰の目に触れることない史料よりも、それらの伝承が今もその地域の人々とともに息づいているという点では貴重なことであろうと思います。

◇江戸期のお寺は学問が重要だった

第二章「江戸時代の常円寺」では「本寺末寺」「檀林」「法縁」など、お寺の者でないとなかなかわかりにくい内容ですが、お坊さんが檀林という学校に入り、どのように学問を修めたかが秩序を形作る大きな要素でした。これは一見当たり前のように思えますが、お坊さんとしてどれだけ勉強していたかという修学の深度によって僧侶やお寺の地位が、今では考えられないほどに厳しく決められていました。つまり「学問」が今よりも遥かに重要であったことは、今のお寺、僧侶を省みる意味でも大切なことであると思います。ちなみに常円寺の歴代住職は、中村檀林で高位の学位にあった僧ばかりで、また、その住職の下、常円寺で学んでから檀林に入学していた、地方出身の修行僧がいたことなどがわかり、常円寺が江戸時代からすでに僧侶育成の一端を担っていた様子がうかがえます。

◇新しい社会とどうつながるか

第三章「明治・大正から昭和初期の常円寺」は、明治維新以降、国と社会のありかたがどんどんと変化していく渦中での、僧侶が社会の一員としてどのように社会とつながろうかと模索していたすがたを、この時期の住職からみています。明治以降の日本の社会への欧米の文化・学問の流入のなかで、僧侶も「洋学」を学び、その成果が社会での活動の一つの基礎となっていきました。その一方で、「檀林」が消滅したことを受けて、新政府の中で許容される僧侶の教育機関創設や、かつての「法縁」を基礎とした奨学金制度など、新しい僧侶の育成のかたちが作られていきました。僧侶として仏教・法華経の弘教を根本としながら、西洋の学問にも触れ救癩や免囚保護などの事業活動を通じて社会とつながっていく、常円寺の歴代住職の特色ともいえます。


計画の変更

さて、こうして檀信徒に向け本堂建立の計画が伝えられ、その賛同が求められました。明和二十九年七月にはその成文規定も検討されました。その後、着工時期は明和三年七月に延長されたが、大きな変更もなく進められてきたわけです。しかし、同年七月二日役員会の席上から、その計画の再検討が提起されることになります。その理由は、資金の問題でした。建築の設計者（大林組）から見積りがされましたが、その額は計画の一五倍ほどでした。「これでは到底建設出来ない旨、設計の変更と共に再見積をしてもらうことにする」ことを申し渡されたのです。それから、設計変更の本堂とする事、また教授堂とする事、二段の四〇坪構造堂をやめ、簡単で本堂とすること、また教授堂とすることによって経費を節減すると申し渡されました。その席においても、設計変更を直し、見積りをさせることに決定し、同年十月八日に建築工事の最終的な見積りが承認され、十二月には建築工事に着手することになりました。

悲願の具体へ

以上のごとく、本堂再建にあたっての資金の調達もっとも困難な問題でした。本堂再建には檀信徒とともに、堂内の荘厳や付帯工事にも資金が必要となりました。

第四章 戦後復興から現代へ 二〇九

本堂のレリーフ「日」☉と「蓮」⊛

本堂の荘厳 二〇九

◇常円寺の「復興」

第四章「戦後復興から現代の常円寺」は、空襲によって焼失した当山の復興をたどりました。それらは当然、建物や境内の再建が第一ですが、それとともに京都本山の再興、幼稚園の創設、アメリカでの別院建立など、新宿の外へも展開して進んでいきました。つまり常円寺の「復興」は寺内の復元だけではなく、新しい社会での常円寺の役割を見定めながら進められていったであろうことがわかります。

◇いまのすがたをきちんと知る

そして、第五章「常円寺の『今とこれから』」では、いま常円寺がどのような状況にあり、なにが行われ、目指しているのか、私たちが目にし、耳にしている常円寺の「いま」をまとめました。「歴史とは過去と現在との対話である」という言葉がありますが、過去によって今があるという、その「いま」をきちんと知ること、そして、これからは何をすべきか、ということをいかに意識しているか、という思いで書いてあります。

◆史料に残らなくても……

『福聚山史』は、『季報』誌上で平成十三年七月から連載が始まったこの「福聚山史」がその礎となっています。二つの『福聚山史』は、いずれも常円寺がどういうお寺なのかを知っていただくことを第一にまとめてきました。すでにご承知の通り当山は昭和二十年五月の空襲により焼失したために、古い資料はありません。けれども史料がなくても、この四百二十年余りには、数多の人々が関与していることは間違いありません。常円寺の歴史はそうした人たちによる横糸が織りなす重層の「縁」によって成り立ってきていることを心にとどめながら『福聚山史』を読んでいただけたらと思っています。